

日本国際情報学会中国事情研究部会

日中関係の変化について
～古代と現代～

2025年12月13日

村越稔

本発表の経緯と目的

- ・日本は古代から江戸時代まで、中国から多くのことを学んできた。それらをそのまま、あるいは日本人なりの改良を加えて、活用してきた。（日本人自体が、元は大陸や島嶼部から移住してきた民族である）
- ・明治維新以降は、西洋の文化を取り入れて急速に近代化し、その導入の遅れた中国・朝鮮を追い抜いた。そして戦争を起こし、アジア諸国を下に見るようになったが、行き過ぎて敗戦を迎え、再度欧米の技術・制度を取り入れて、再出発した。
- ・技術者として中・韓国に技術を教えるうちに、日中韓の歴史に興味を持ち、定年後、双方向の技術伝播について研究してきた。
- ・現在国内には、排他的な意見を持つ人もいるように見えるが、比較優位が経済の基本であり、グローバルな時代になって、近隣諸国との貿易、人的交流なしには、日本人の生活は成り立たず、「中国事情」研究結果からの知見を述べたい。

今までの研究1 修士論文 古墳

最初に故郷長野市にある大室古墳をテーマに、朝鮮～日本の考古学を研究した。大室古墳は人頭大の石を積み上げた積石塚であり、渡来人の埋葬と考えた。国内、韓国、中国(集安)、北朝鮮にも調査に行った。古墳形態、周囲環境や景観(風水)は良く似ており、渡来文化であることは確信できたが、その根拠を実証するまではできなかった。



今までの研究2 姨捨伝説

- ・故郷の近くにある伝説だが、韓国には同様の「高麗葬」があることを知り、調べてみると元はインドで、中国では「棄老国縁」という仏教説話があり、日本へと伝わった。
- ・医療費の半分を高齢者が占めていると知り、無理に長生きさせることは若い人の負担になるので、年齢相応に自然に死を迎えることも必要なのでは、と研究を始めた。
- ・研究者が日本各地の講演会でその風習に関係する地名を言うと、講演終了後に寄ってきて「実は私の部落にも似た名前のある場所がある」と小声で言う人がいる。
- ・伝承の多い高知県に調査に行った。土地の人に聞いて、現地確認もし、それらしい状況は分かった。
- ・しかし現地の人に説明はしてもらえても、触れて欲しくないことが分かり、中断した。

これも結論は出せなかったが、この説話が日本古来ではなく、海外各地にもあることを以下簡単に紹介する。

雜宝蔵經(四) 棄老國縁 老人遺棄国説話

天神又以二白驎馬形色無異。而復問言。誰母誰子。

天神が形と色に差のない二頭の白馬を持って、尋ねる

「どちらが母馬でどちらが子馬か？」

父答言。與草令食。若是母者。必推草與子。

父答えて言う「草を与え食べさせて、母馬ならば、必ず草を子馬に与える。」

雜宝蔵經はこの棄老国縁だけでなく、121ある題目全てが「良い行いをすれば良い報いがある」という説話集である。仏教の基本的教えである輪廻転生・因果論を分かりやすい身近な例え話で民衆に説いた教本であろう。（長尾光之：中国語訳『雜宝蔵經の言語』福島大学教育学部論集32号の2、1980）

・さらに似たような伝説はヨーロッパ、アフリカ、イヌイットにもある。

小塩節(1990)『**グリム童話をドイツ語で読む**』 PHP研究所より
おじいさんと孫 “Der alte Grossvater und der Enkel”

昔々老人がいました。スープをこぼしてしまう。息子夫婦はそれがいやで、老人を部屋の隅に座らせ、食事は土製の鉢で食べていましたが、老人が小鉢を落とし、割れました。妻は老人を叱りつけ、木の小鉢を買って来てそれで食事を与えました。あるとき、小さな孫が床の上で木切れを集めています。お父さんが尋ねた。“Was machst du da?” fragte der Vater. 〈何をつくってるんだね〉その子が答えて言うには、“Ich mache ein Troglein.” 〈小桶をつくってるんだよ〉〈ぼくが大きくなったら、父さんと母さんにこれでごはんを食べさせてあげるんだ。〉

すると夫婦は互いを見つめ合い、泣き始め、老人を食卓へ連れてきました。それからは皆でいっしょに食べました。

これは姨捨伝説の「モッコ型」や高麗葬の「チゲの話」と良く似ている。

金さんは老母を担いで行ったチゲ(지게 背負子)を捨てようとした。
その時息子が「お父さんそのチゲを捨てないでください。私もお父さんが老人になった時に使いますから」と言うのでした。この言葉を聞いた金さんは、反省し、老母を再び家に連れて帰って、親孝行しながら暮らしました。
(cf. 鍋料理のチゲは치게)

このように、この説話はアジアだけではなかった。
食べるのにやっとだった時代、働ける人が生き残るためだったと考える。
今の時代の感覚で評価するのは難しい。

今までの研究3 邪馬台国(宮崎説)

関心を持つ一般人も多く、畿内か九州か、どこにあったか長年の論争がある。

『三国志』『魏書東夷伝倭人条』(魏志倭人伝)の解釈として、半島～北九州までは説が一致している。そこから南と東に説が分かれるが、原典の南を東に向かうとして邪馬台国を京都とする説が優勢である。

外国人は中立的立場で読めると考え、謝銘仁著(1990)『邪馬台国 中国人はこう読む』(徳間文庫)と、韓国語版の김원중訳(1966)『삼국지 위서 2(三国志魏書 2)』(민음사)を和訳して解明を行った。

今回の発表は、「何が正しいか」ではなく、日本の古代史は日本には記録が無く、「中国の文献が頼り」ということの再確認が目的である。

宮崎説をとる根拠

(1) 方角は原典通り南へ

羅針盤を発明した中国人が方角を誤ることはありえない。

(2) 畿内説の場合、北九州から畿内まで、途中に大きな部落がいくつもあったはずだが、全く記述が無い。九州の方が途中は山地で、部落の記述が無くても理解できる。

(3) 距離は日数からの推定であるが、中国文献の尺度で計算し、これで南下すれば海に出てしまうとしている説がある。しかし平坦な中国平野部と、山や溪谷があり森林が生い茂る日本では、移動速度が全く異なり、中国の尺度を当てはめられない。

(4) 気候・風土から南東部

原典には暖かい国の服装や漁業の描写があり、冬に雪の降る内陸の京都ではない。

しかし、宮崎にはそれらしい遺跡が見つかっておらず、今後の調査が待たれる。

今までの研究4 三角縁神獣鏡(日本製説)

この研究も、卑弥呼の使者が中国で下賜された、とする説と、日本で作られた、とする2派の論争が続いている。

- ・先行研究は内区の神獣形状についての研究が多い。

自分は外区にある鋸歯文の精度に着眼し、

精度が高ければ中国製、悪ければ日本製

という仮説で研究し、日本製という結果が得られた。

- ・しかし日本の学会には受け入れてもらえなかった。学会の主流は、中国から下賜されたものとしているが、ここでは

- ・中国で下賜された説の場合、為政者として認めてもらう中国の権威が必要だった。

- ・日本人製作説の場合、中国人の技術指導が必要だった。ということの再確認が目的である。



分析方法

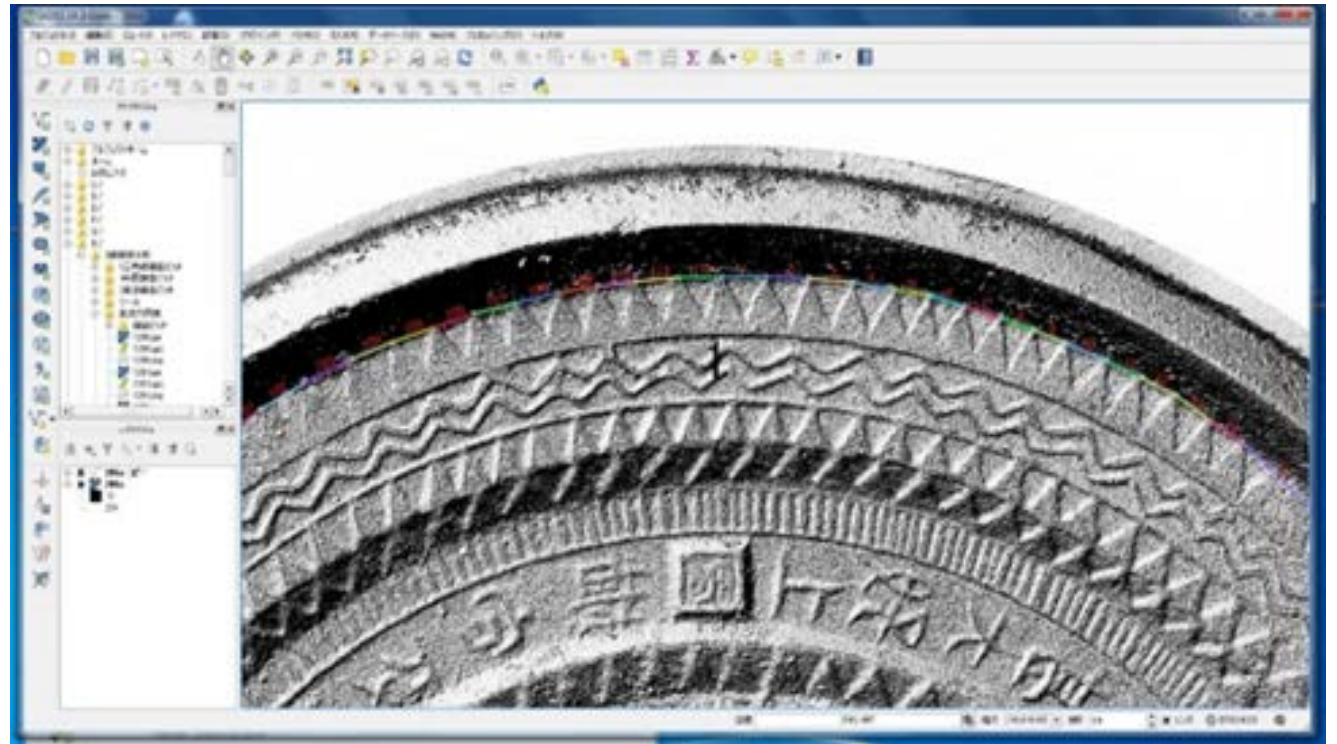
外区にある鋸齒文の製作精度を分析することで工人の分類を試みようと考えた。
鋸齒文の隣り合う歯の距離(ピッチ)を測定し、その寸法誤差(ばらつき)の標準偏差を出して比較する。

分析対象

榎原考古学研究所『古鏡総覧 I』に掲載された写真のうち、鋸齒文が測定可能な168面と巻末の内区不明な鏡片2面について測定した。

測定データ

PCの画面上で、画像をQGISにより、歯の歯の頂点距離(mm)を測定した。



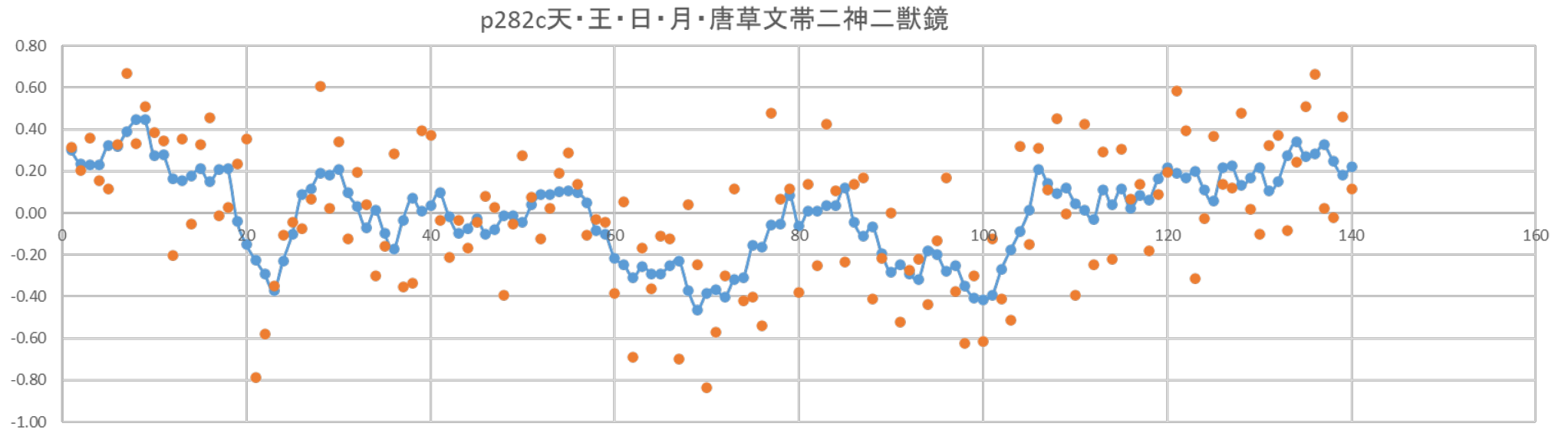
データのグラフ化

各歯のピッチ(mm)から全体の平均値を引き、偏差(ばらつき)を出す。

縦軸にピッチ偏差をとり、グラフ化しても特徴は掴み難い。(下図朱色)

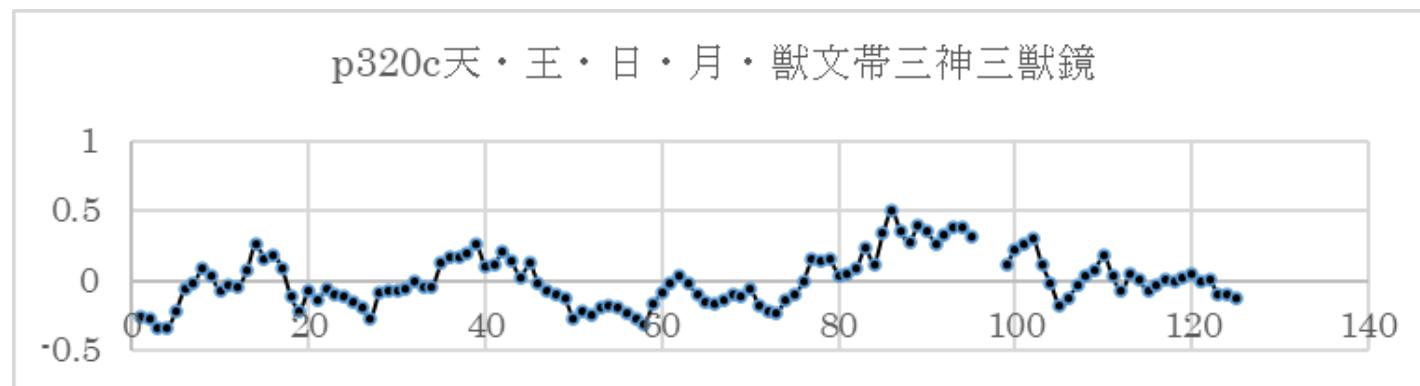
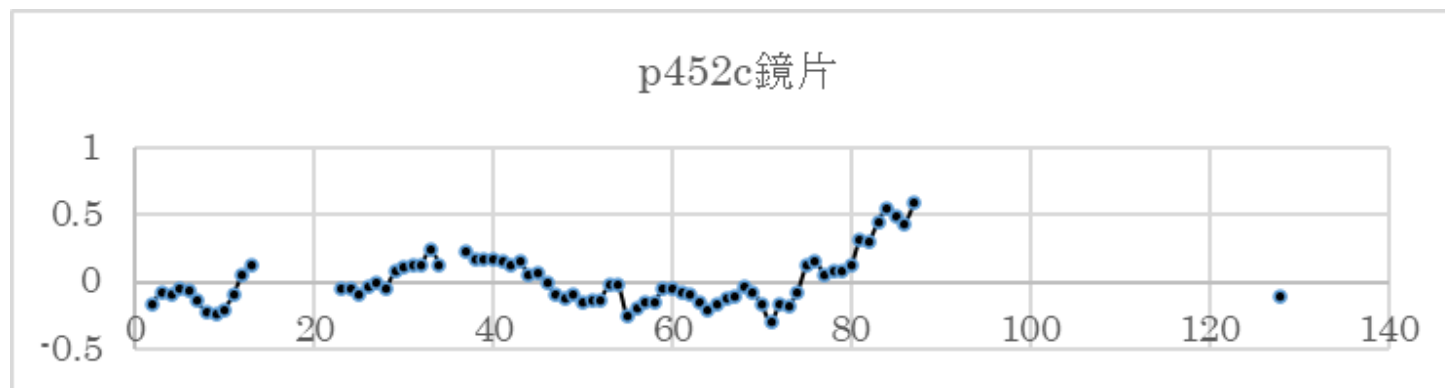
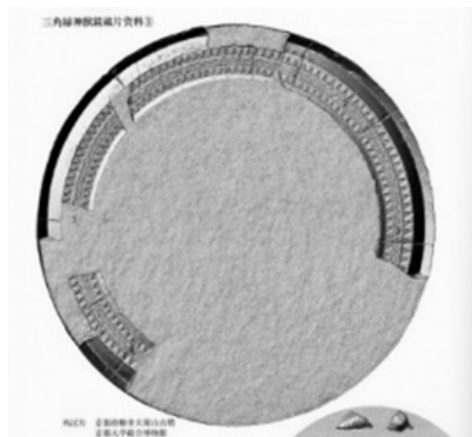
工人は目標とする寸法を最初のピッチとし、以降それを見ながら作って行き、時々最初のピッチを見ては修正する、と想定される。そこで隣合う左右2つ1組5ピッチの平均を出し、その全体の平均値との差を「5ピッチ平均偏差」とする。

それをグラフ化すると、工人のクセが波形パターンとしてよく現れる。(下図青色)



分析例1

『古鏡総覧』の巻末に外区2面があるが、鏡型式は内区で分類されるため、明記されていない。歯数と誤差波形の特徴から同範鏡を探し出した。

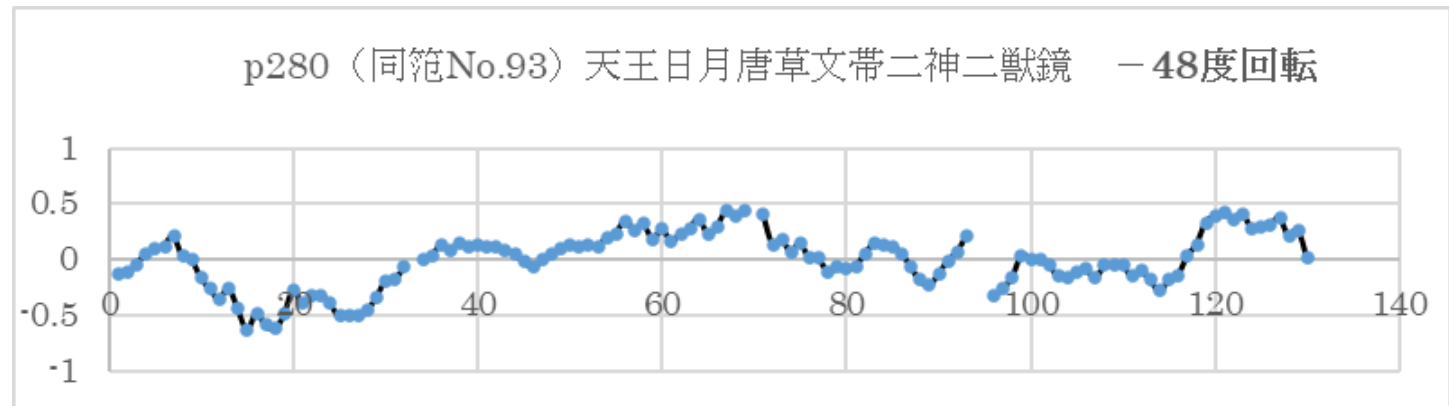
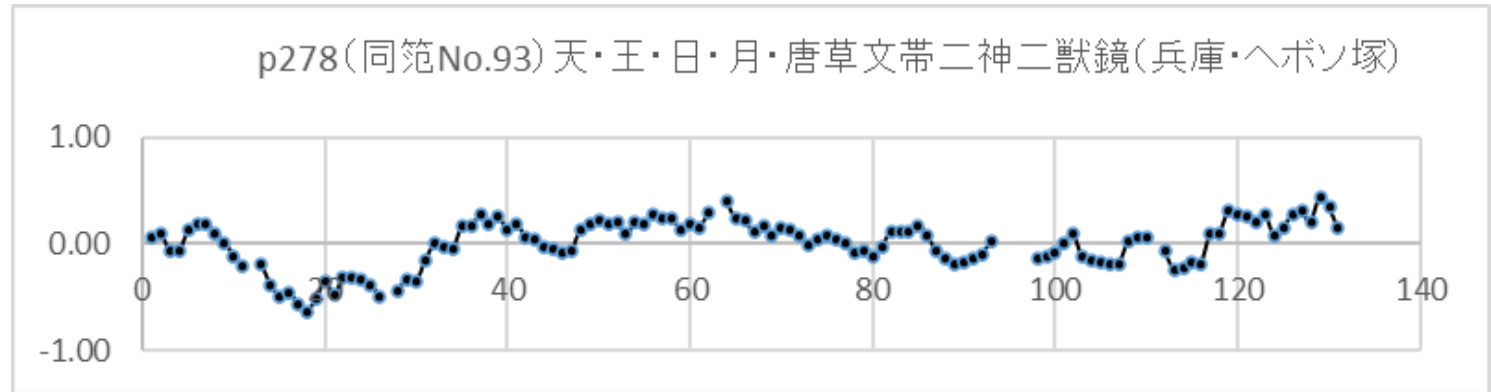
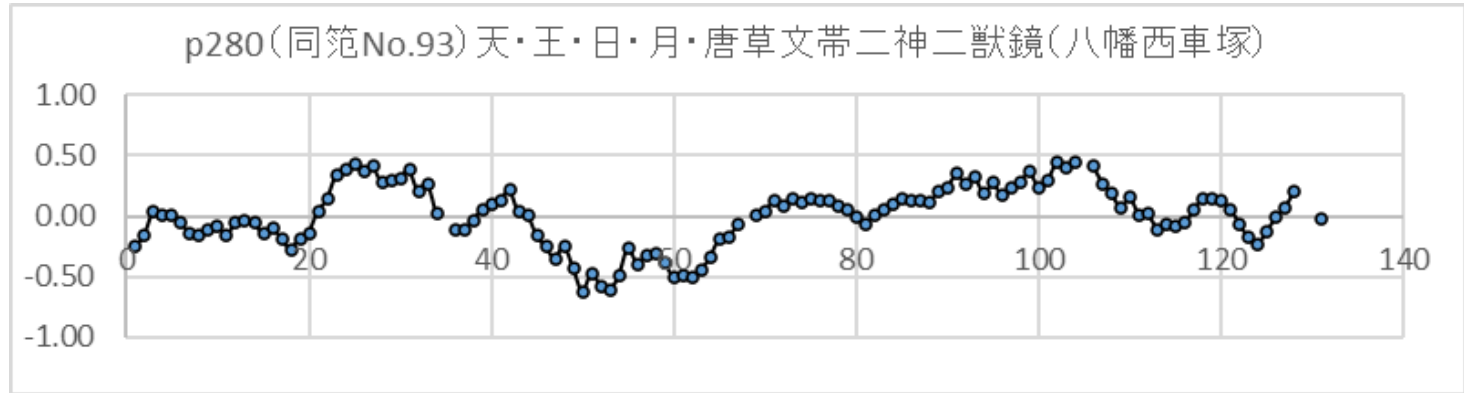


分析例2

同範である5面のうち、
p280鏡の外区は他の内
区とは振れている。

P280鏡の波形を、35歯
(48度)CCWに回転(左
にシフト)させると他と良
く似た波形となる。

cf.今はAIで容易に答え
を出せるはず。



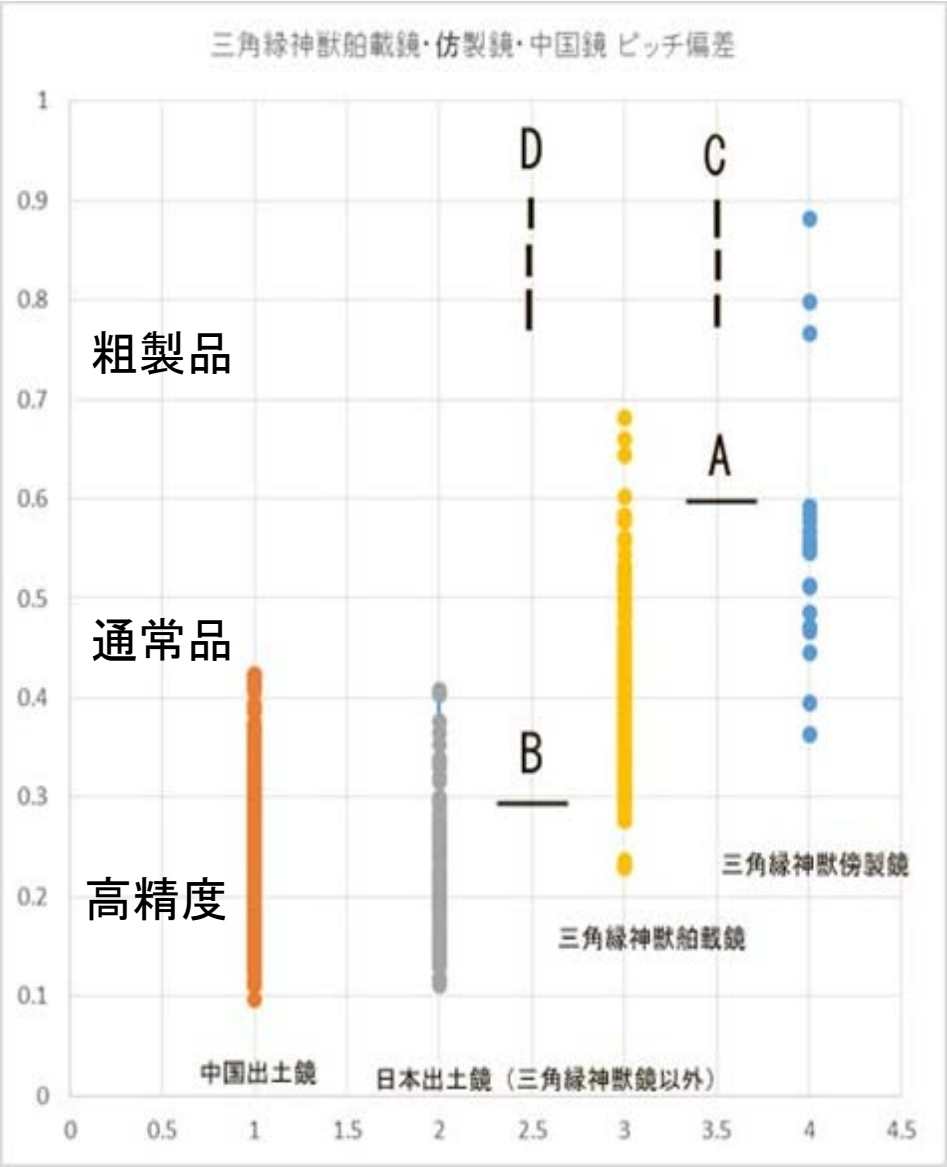
中国鏡と三角縁神獣鏡の鋸歯文製作精度比較

ラインA, Bで分けた範囲の面数割合(%)

ピッチ偏差	中国鏡	日本出土 中国鏡	三角縁神獣鏡 舶載鏡	三角縁神獣鏡 仿製鏡
0.6<	—	—	3	14
0.3~0.6	21	15	90	86
<0.3	79	85	7	—
今までの群分け		中国製	日本製	

結論

- ①中国鏡の大半は高精度品であり、通常品が大半の三角縁神獣鏡は日本製である。
- ②三角縁神獣鏡にも高精度品があり、それは最初に中国人が作り、その指導の下で日本人が作り始めた。仿製鏡は技術の未熟な日本人が作った、と考える。



学会での発表



アジア鑄造技術史学会台北大会
(中央研究院 2017年8月)
ポスターの前で 中国社会科学院白副所長

New classification by this Analysis

Grade	Range	China mirror 中国鏡	China mirror in Japan 日本出土 中国鏡	trihedron-edged	
				Imported 三角縁神獸鏡 船載鏡	Imitated 仿製鏡
Low 粗製品	0.6<	—	—	3	14
Usual 通常品	0.3 ~ 0.6	21	15	90	86
High 高精度	<0.3	79	85	7	—

Made in China Chinese made in Japan Made in Japan

アジア鑄造技術史学会西安大会
(西北工業大学 2019年8月)
中国語・韓国語の原稿データも準備し、主宰の研究者と中国国家博物館の王先生(女性)が中文コピーを希望されたので差し上げた。

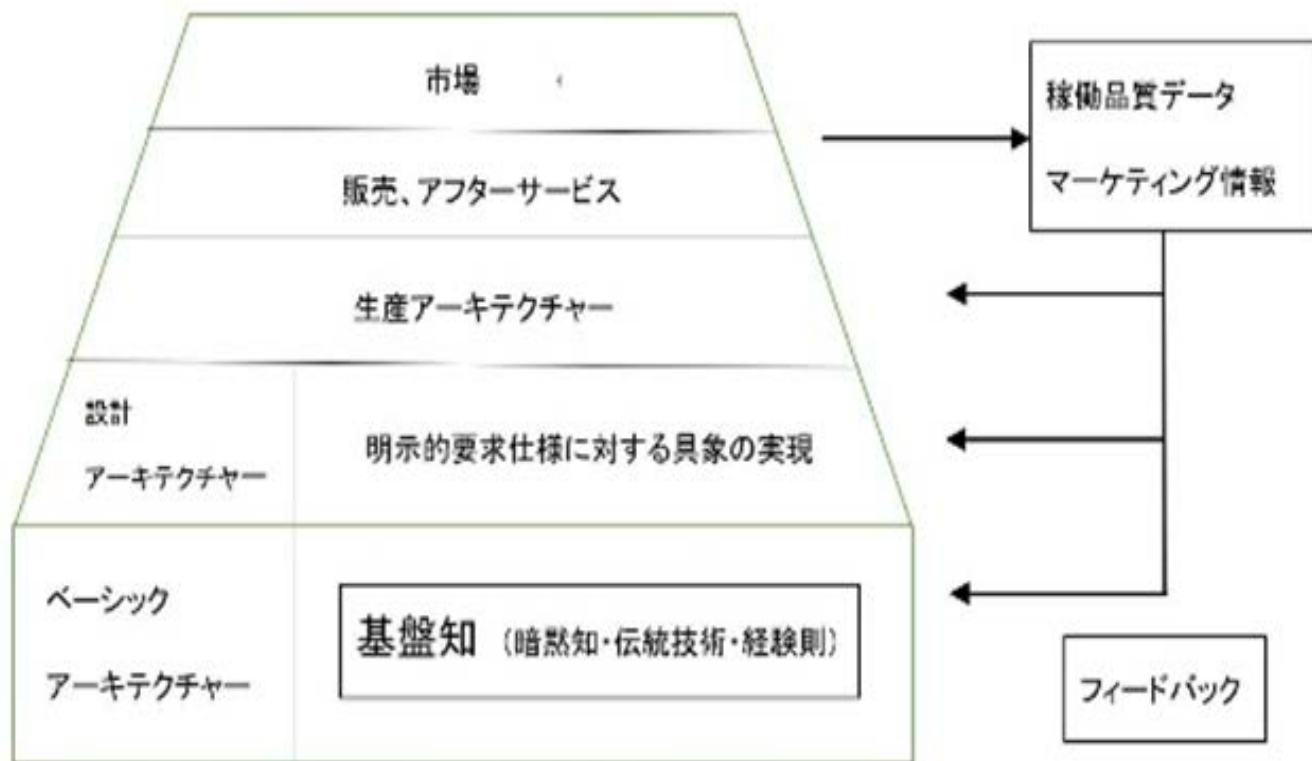
現在の研究5 新シルクロード沿線地域の産業・貿易振興への日本の支援

次に高句麗の考古学研究も考えたが現業への復帰もしたく、WEBで調べると日本大学の陸先生がシルクロードの経済学を研究されていることを知り、研究を始めた。

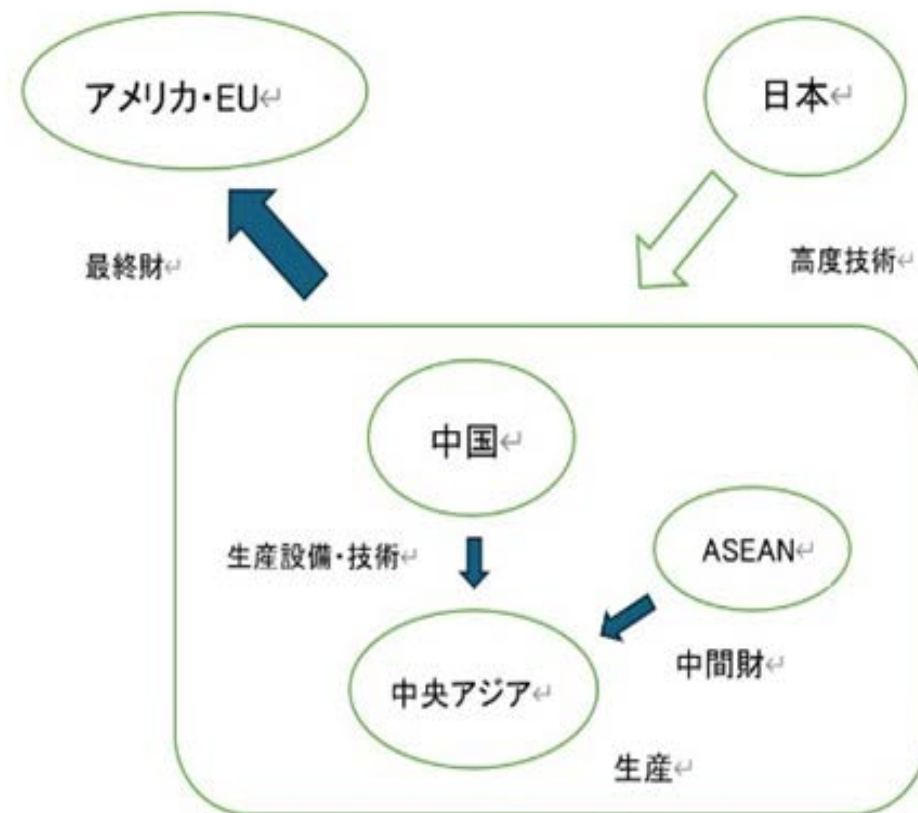
- ・日本をリーダーとするアジア諸国への雁行型生産移転は終わった
- ・中国は「世界の工場」になった
- ・日本が直接手掛けるのにふさわしい生産移転先はもう少ない。
- ・日本の得意な特異技術として、アナログ・すり合わせ技術があり、真似が容易ではない。IT/デジタル化が進んでも、ものづくりの基本はアナログ技術である。

結論

- ・例えば内陸の中央アジアでは、中国が生産拠点を作り、一般部品は周辺国家から供給する。それを日本が高度技術や高度部品で支援する、という地域間協業モデルを提起する。
- ・アジアの国々も技術レベルを高め経済発展しているが、高度技術分野においてはまだ日本の役割があり、今後もそこを磨き続けて、海外に貢献して行くことが重要である。



日本の技術基盤



地域間協業モデル

参考文献

1. 姨捨伝説

長尾光之(1980)「中国語訳『雑宝蔵経』の言語」福島大学
教育学部論集32号の2

井本英一(1996)「棄老説話の起源」桃山学院大学文学部
国際文化論集 14, 77-100,

弃老国縁 http://www.fzzj.org/Article_Show.asp?ArticleID=616
最終閲覧2013.02.21

向山雅重(1990)『信濃民俗記』慶友社

南方熊楠(1918)『棄老傳説に就て』文武堂店

2. 邪馬台国

謝銘仁(1990)『邪馬台国 中国人はこう読む』徳間文庫

大塚初重(2012)『邪馬台国をとらえなおす』講談社

森浩一(2010)『倭人伝を読みなおす』ちくま新書

檀原考古学研究所(2013)『海でつながる倭と中国』新泉社

鳥越憲三郎(1997)『古代朝鮮と倭族』中公新書

上田正昭(1977)『倭国の世界』講談社

王仲殊、樋口康隆他(1997)『三角縁神獣鏡と邪馬台国』梓書院

西谷正(2009)『魏志倭人伝の考古学』学生社

西谷正(2014)『古代日本と朝鮮半島の交流史』同成社

森浩一(1995)『古代史の窓』新潮社

奥野正男(1981)『邪馬台国はどこだ』毎日新聞社

王金林(1992)『邪馬台国と古代中国』学生社

汪向榮(2007)『中国の研究者のみた邪馬台国』同成社

王巍(1993)『中国からみた邪馬台国と倭政権』雄山閣

姜吉雲(2010)『倭の正体』三五館

奥野正男、佐原真他(1994)『邪馬台国は東遷したか』
三一書房

安本美典(2009)『邪馬台国畿内説徹底批判』勉誠出版

樋口康隆(1971)『日本人はどこから来たか』講談社

森浩一、田中俊明、高島忠平(2011)『歴史読本「魏志倭
人伝」全文を読む』新人物往来社

都出比呂志(2011)『古代国家はいつ成立したか』岩波新書

黒田善光(1993)『邪馬台国筑紫広域説』葦書房

石野博信、高島忠平、西谷正(2011)『邪馬台国何がどこ
まで言えるのか』朝日新聞社

石野博信、高島忠平他(2012)『邪馬台国とは何か』新泉社

金達寿、齊藤忠(1988)『古代の高句麗と日本』韓国文化院

上田正昭、網干善教(1986)『高句麗と日本文化』講談社

3. 三角縁神獸鏡、測定対象鏡文献

岡村秀典(2017)『鏡が語る古代史』岩波新書

杨金平(2018)「日本出土的中国工匠陈是(氏)纪年铭铜镜的再探讨」

徐州工程学院艺术学院「发现与研究」文博·2018年第2期

檀原考古研究所(2006)『古鏡総覧1』

京都大学文学部(1989)『椿井大塚山古墳』

根津美術館(2011)『中国の古鏡』根津美術館年

京都国立博物館(1993)『倭国一邪馬台国と大和王権一』毎日新聞社

檀原考古学研究所附属博物館(2000)『大古墳展』東京新聞年

島根県立美術館(2003)『上海博物展』大広

泉屋博古館(2004)『泉屋博古 鏡鑑編』

吳曉均(2015)『皇帝的鏡子』故宮博物院

魯文生(2004)『山東省博物館藏珍・銅鏡卷』山東省博物館

徐忠文(2013)『漢廣陵国銅鏡』文物出版社

王士倫(1987)『浙江出土銅鏡』文物出版社

陳鳳分(1987)『上海博物館藏青銅鏡』上海書画出版社

洛陽博物館(1988)『洛陽出土銅鏡』文物出版社

淮南市博物館(2011)『淮南市博物館藏鏡』文物出版社

長沙市博物館(2010)『長沙市博物館藏鏡』文物出版社

蘇州博物館(2010)『蘇州博物館藏出土文物』文物出版社

湖北省博物館顎城市博物館(1986)『顎城漢三国六朝銅鏡』文物出版社

ご清聴ありがとうございました